理想の読書

イルマ・ラクーザ著、山口裕之訳
『ラングザマー　世界文学でたどる旅』
共和国、二〇一六年一一月

なんという贅沢な本だろう。

スピードばかりが追求される多忙と喧噪の現代社会で、敢えて「ラングザマー（もっとゆっくり）」を訴えるということ。それは、ある意味で保守的・時代錯誤的であるようにも見える。しかし著者イルマ・ラクーザ（一九四八年生れ）は、まったくたじろぐ気配さえなく、ゆとりを持って生きることがどれほど大切かという主題をひたむきに説いていく。まるで変奏曲のように、世界文学のさまざまなテクストを自在に引用し主旋律のリズムや調子を少しずつ変えながら。

九つの変奏曲はゆったりと心地よいので、いつまでも聞いていたくなる。音楽用語でもある「ラングザマー」と示し合わせているかのごとく、章が進むにつれ叙述はいっそうのびやかに遅くなっていくように感じられる。目次がアクロスティックになっていて各章のタイトルの最初にある文字をつなげると〝LANGSAMER〟（ラングザマー）になるという念の入れようには（これは訳者泣かせだが）、茶目っ気ばかりでなく著者の強い意志が込められていると言えよう。

贅沢なのはそれだけではない。著者と親しくしているという日本語・ドイツ語バイリンガル作家、多和田葉子のエッセイが収録されているのだ。この文章がまたラクーザのテクストと呼応していて素晴らしい。多和田はラクーザを「文学を創作することと、文学について語ることの間の境界線など自然と消してしまえるような、稀に見る作家」（一九四ページ）と賞賛しているが、じつに正鵠を得ている。実際ラクーザは、創作家と研究者の境界を軽やかに跨ぎ往還を繰り返しながらしなやかに知的営為を続けてきた。

彼女は、スイス在住のドイツ語作家・詩人であると同時に、レニングラード（現在のペテルブルグ）に留学したことのあるスラヴ文学研究者であり、チューリヒ大学で教鞭を執る教育者でもある。さらには、父がスロヴェニア人、母がハンガリー人で、ハンガリー語、フランス語、ロシア語、セルビア・クロアチア語の文学作品をドイツ語に翻訳しているマルチリンガルの翻訳家でもある。つまり、彼女の存在そのものが「越境的」あるいは「世界文学的」と言っていいくらいなのだ。

本書の主張は、エピグラフに掲げられたロベルト・ヴァルザーの言葉「われわれはゆっくりすることがあまりに少ない、そうはっきりと感じている」（一〇ページ）に凝縮されている。本書全体に二項対立が貫かれており、一方がゲーテの言う「ファウスト的悪魔的な速さ」（一二ページ）や「有用性ばかりを追い求める志向性」だとすると、著者がよしとするもう一方の価値観は、「感覚的であること、観想的であること、リラックスしていること」（二二ページ）という「重要な三位一体」に象徴されるものであり、それは読書を通して「自分という境界を越えて、自由に戯れる自律的空間のなかを動いてゆく」（二二ページ）ことだと定義される。そしてさらに敷衍され、「自分自身を忘れてぶらぶらするというこの行為だけが、創造の謎を瞬間的に解

き明かし、自分自身についてのアイディアを落ち着かせ静める資質を持っている」（一一七ページ）と述べるヴィルヘルム・ゲナッティーノや、挫折こそが「無限なものや絶対的なものを直接的に経験する唯一のもの」（一三九ページ）と言い切るツヴェタン・トドロフらの言葉が引かれることによって、創造者には「遅いこと」のみならず、退屈や挫折といった普通ならネガティヴに捉えられる現象にまでポジティヴな意義が与えられる。こうしてラクーザは、現代社会が半ば暴力的に強要してくる「速さ」に抗って時間的な余裕と精神的な豊かさを寿ぐ朋友たちを、世界文学のあちこちに見出しているのである。

ここで思い起こされるのは、ロシア・フォルマリストのヴィクトル・シクロフスキーが「異化」について説明した次の有名なくだりである。「生の感覚を取り戻し、事物を感じ取るために、石を石らしくするために、芸術と呼ばれるものが存在する。芸術の方法とは、事物を異化する方法であり、知覚をより困難にし、より長引かせるために、日常的に見慣れた事物を奇異なものとして表現することである」。知覚のプロセスが芸術であるなら、そのプロセスを「遅らせる（長引かせる）」ことが重要だというのだ。『ラングザマー』にはシクロフスキーの名前こそ出てこないが、著者ラクーザは、ドストエフスキーの『罪と罰』と出会って文学にのめり込み、やがて「ロシア文学における孤独」というテーマで博士論文を書き、マンデリシュタームやツヴェターエワに親しんだというロシア文学の専門家である。ロシア・フォルマリズムに無関心なはずはない。送り手が事物を異化して知覚を長引かせ、受け手がそれをゆっくりと感受する。そんな双方向の創造的営為が彼女の考える「理想の読書」なのではなかろうか。

ラクーザが、本と読者との関係を恋愛のアナロジーで捉え、「愛の営みとしての読書、読書としての愛の営み」（三四ページ）という魅惑的な表現を用いているのも興味深い。読書の身体性。これは、「人間が速さという力を機械に移し換えるとき、すべては変わる。その瞬間から人間の身体はかかわりをもたなくなり、非身体的で非物質的な速さとでもいうようなものに奉仕することになる」（六八ページ）というミラン・クンデラの言葉と響き交わしている。本書からほのかにエロティシズムが匂いたってくるように感じられるのは、読者と本との間に、ひいては作者と読者の間に、身体的な歓びが存在するからなのだろう。

そうした身体的な手応えを感じつつ悠然と生きることが、時間のプレッシャーを減少させ最終的に自由を獲得することにつながるという。もちろん、慌ただしい現実を生きている者にとって、これはなかなか実現できることではない。しかし今回私は、本書の内容にしたがって本書をゆっくり繰り返し読んでみて、久しぶりに贅沢で幸福な時間を味わうことができた（そのため書評の締切りを大幅に過ぎてしまったのも事実だが）。

ちなみに、二〇〇九年に彼女の自伝的作品『もっと海を』のロシア語訳が出版されたとき序文を寄せたのが、スイス在住のロシア語・ドイツ語バイリンガル作家、ミハイル・シーシキンだ。どうやら彼もラクーザの「親密圏」に属する同志であるらしい。その序文でシーシキンは、彼女のことを「遊牧民」と呼んで、その自由な詩的精神に感嘆している。

（沼野恭子）